

人と組織の
新・論・点

CATALYST*

カタリスト

山本佳司

高いレベルの個人技を武器に全国制覇した野洲高校サッカー部監督

目指すのは
ちょいワルで、
セクシーなサッカー



野洲高校は、全校生徒397人の県立高校で、サッカーの推薦入学もありません。全国高校サッカー選手権大会優勝メンバーは、平均身長168センチの普通の体格の子たちでした。この状況で全国から選手を集める強豪校とどう戦うかと考えたらず術しかありません。足が速い子は寝てても足は速いし、体が大きい子は大きい。でも技術なら練習でうまくなるし、努力ならできるからです。

個人の得意技が
チームの強さになる

テクニックでは日本一を目指そうと、武器となる技術を徹底的に磨きました。攻撃も守備も平均的にできる選手は作りません。そんなプレーは魅力ないですからね。それよりも得意な部分を伸ばして、守備は弱いけどドリブルなら日本一、足は遅いけどパスの正確さは抜群な選手を育てる。勝負する武器が明確になると、例えば“こいつは足が遅いからドリブルはしない。でも絶対ワンタッチでパスをする”とチ

ームメンバーは分かります。だからその選手がボールを持った瞬間、みんなパスを受け取るために走り出しているわけです。

サッカーはいかに敵と駆け引きして、先手を打って勝つかを競う陣地取りの戦いのようなものです。合図で始まる相撲や剣道には、日本の正々堂々というよさはある。でもサッカーで真っ向勝負をしていたら負けてしまいます。100メートル走で、自分が相手より1秒遅いなら、1秒早く走り出せばいい。それが“ちょいワル”ということです。実際、50メートル6秒の選手に、7.5秒の野洲の選手が勝つには、いかに意表をついて先手を打つかが勝負になるのです。

テクニックは日本一だというプライドがあるから、試合の結果より、いかに自分たちの技術を発揮したクリエイティブでセクシーなサッカーができるかにこだわる。選手たちはセクシーなサッカーをできるのが喜びなんです。ドリブルが得意な子は、どうやって相手選手をかわそうかと狙っていて、自分のテクニックで抜けたときが最高に気分

がいいんですよ。

精神力はプライド
忍耐力じゃない

忍耐強さを精神力だと日本人は考えがちだけど、僕はプライドだと思う。全国高校選手権大会の決勝戦は、鹿児島実業の昨年度の優勝校として負けられないというプライドと、野洲のテクニックへのプライドの戦いでした。後半残り5分で同点に追いつかれて延長戦になったときは、精神的にも疲れていた。そのとき選手にがんばれとか優勝しようと言っても意味はないんです。僕は「よかったな、後20分このメンバーで戦える。このメンバーでできる最後の時間を大事にしよう」と声をかけました。それは、持ち時間20分の中で、守備を1秒でも短くして、自分たちが練習してきた技術を活かした攻撃を1秒でも長くしようということです。自分たちのサッカーをしよう。その気持ちで、50メートルのサイドチェンジのパス、ドリブル、ヒールパスをつないだ決勝ゴールを生んだのです。

文/内田美代子(編集部)

PROFILE やまもと・けいじ

滋賀県生まれ。日本体育大学でレスリング部に所属。大学4年次の時に交換留学生としてドイツのケルン体育大学へ。帰国後にサッカーの指導者を目指す。滋賀県の体育教諭となり、1997年に滋賀県立野洲高等学校に赴任し、サッカー部監督に就任。昨年度の第84回全国高校サッカー選手権大会で初優勝。